

風 語 解 析

土 佐 林 義 雄

日本風土の先住民族は漁撈民であつたらう。漁撈では気象に最も深い関心が注がれ、季節風の方向や強弱が常に観察されていた筈である。それで風語を解析すれば、その漁撈民族がどこの種族であつたかが、判明することになると思われる。

アイヌ族の民俗を追究して、その古代習俗が朝鮮の古俗に一致し、それも日本内地で接受したことを確め得たので、改めて吾々が使っている冷、寒、凍の言葉の解析を試みたところ、朝鮮語から展化した出雲語であつたことが判明し、いまの吾々には雪一語だけしか残されていないのかかわらず、雪を意味する古語が多数にあつて、古代地名に残されていたことをも知った。更に風語を解析したところ、これまた出雲語であつて、それが沖縄の果てまでも及んでいたことが明かとなるに至つた。

ザ	ダ	ズ	ヅ	ジ	ジイ	ヂ	ヂイ	ゼ	ヂイ	デ
サ	タ	ス	ツ	シ	シエ	ヂエ	チ	セ	テ	
カザ	カダ	カズ	カヅ	カンジ	カンジイ	カンジエ	カヂ	カンゼ	カデ	エ
カサ	カタ*	カス	カツ	カシ	カジ	カジイ	カジエ	カチ	カゼ	カデ
sa	ta	su	tu	si		ti		se	te	
a	u				i			e		

これを見れば、古代の漁撈民族の言葉は、a, u, i の3母音だけであり、a と i の合成音である e が、熟化するまでの過程として、i 音の余韻がまだ語尾に残されており、母音の o が、a と u との間に分化されていない以前の、古い時代の言葉であつたことがうかがわれる。この言語の体系から見て、原語は明かに韓語から出ていると云えよう。

韓語では煙、霧、霞などの微粒の浮遊気が、dja であり、それが、dju, dji, dje に活用されていた。この語に二次音とでも云うべき、抑揚の高い音声で、x² に二つの根がある様に、s 音と t 音に分解するので、サ、ス、シ、セとタ、ツ、チ、テとに活用変化していたのである。それで出雲語では、かすみ=かつみの霞、佐賀=多賀が冷めた、須川=津川が寒む川。志賀=千賀が凍るとなる。また、風の加佐=加多となり、風=方であつたので、高田=タカタ=田方となり、その意は共に冷風(タカタ)であつたのである。それで、古事記にある宗像の女神とは武奈加多^{フナカタ}の吹風で、風の神のこととなる。これで、上、中、下三天に鎮座するいわれも解かれ、同じ三天に鎮座する男神の筒男神も、実は寒寒乎と云う寒冷神

これまで意味不明な古代地名はほとんどアイヌ語といわれていたが、実は出雲語での気象命名に、音そのままの漢字を当てていたものであつたのに、これまで学者には全く気付いていなかった。それを検討すれば、古代日本の気象がいかに冷寒であり、いかに風雪が多かつたかが推量されると共に、民族移動の経路も、気象変化の路に伴って、明瞭になることと思う。その全貌を明かにするに先立って、まず風の地方名称の解析を試みることにする。

「風位考資料」には、柳田国雄先生の風位考、関口博士の風の地方名研究が載せられ、巻末の資料篇には、地方風語が多数に収集してある。それらの風語の末語を統合し、整理すれば、その構成は次の様な関係となっている。

であつたことも肯ける。*上表カタ参照

dja の訛りの za は、そのまま風の意に使われていたものが、Kaza, Kaze となつたのは、その気は目には見えないが、物を揺り動かす気なので、韓語の揺り動かすの kan を冠して、kan dja から kan dje となり、更に加世となつていたのであつた。それでカンジ、カンジイ、カンジエ⁽¹⁾ はカゼのなまりではなく、風の名詞であり、北は青森県の津軽地方、南は八重山群島の小浜に、また、カンゼは青森県南部にと、昔の国の両果てに保存されていたのであり、沖縄諸島も出雲語使用の版図であつたことが、明瞭となつてくる。

沖縄の北西風を、nun ba kan dji, nun ba ka dj, nun ba ha dj, nun hu ri ka dje 等と云うのは、雪降り風のこと、nun は韓語の雪。大昔は沖縄も雪が降つた冷地であつたことを語っている。

(1) 風位考資料の資料篇 以下「風資」 P. 5. 16. 58. 82.

韓語で風の名詞は baram baraki. それを出雲語では波羅密、波良見、原見、原海、孕、婆良伎、原木、茨木の漢字を当てて、地名に使っている。風の語幹の bu に助詞を添えた bubu, buo, bunu, buru, buta は、いずれも風吹くの助詞となつているか、その bu が出雲

語では

mu—pu—bu—hu—u—yu

と語韻が変化し、更にその bu が、バ、ボ、ブ、ビ、ベと活用するので、それに応じての風の類語は実に多数に生まれ、気象語だけではなく、物類名称から、地名にまでも及んでいたものであった。その一例を挙げれば

bata の活用から mata の俣、股、又、matu の松、町、mato, moto, moti 的、元、本、持⁽²⁾などの漢字が風吹くの動詞に使われていたのは、従来の文献学では全く想像もされていなかった。それで、古史で有名な筑紫の未羅は松浦で、風吹浦の意であったことになる。

荒股=荒風吹。鹿股=凍風吹。若松=暴風吹。天津=阿松=俄風吹。大町=暴風吹。串本=凍風吹。塩本=凍風吹。熊本=凍風吹。坂元=佐賀元=冷風吹。大牟田=暴風吹。鳩山=風吹山。矢的、耶馬台、夜麻等、山門=雪風吹。

(2) キタモチ、北東風 三重縣北牟婁郡、「風資」p. 41.

bunuの活用から、船、棟、峯、畝、海、羽根、浜などは風吹くから発した名詞と見られ、花⁽³⁾、船、宗などは風吹くの動詞に当てられていたことが、地名の上から判断される。

荒船山=暴風吹山。船坂=風吹坂。尾花沢=暴風沢。宗高=風寒。冷む。花輪=風吹く=埗。高輪=多賀花輪=冷風吹から、冷風が吹く所であるゆえ埗はハナワで、アイヌ語ではなく、逆にアイヌ語の中に出雲語が残っていたことになる。

(3) オシハナ、長崎諫早、タハナハニシ、鹿兒島。「風資」P. 2.

buru の活用から振、降、原、津、村⁽⁴⁾、室、丸、盛、守等は風吹くの動詞。

榛原=拜原=南風吹。相浦=凍風吹。村山=風吹山。津村=害風吹。室積=風寒三。三諸山=風吹山。室戸=風吹く。丸子=風吹く。玉丸=冷風吹。丸森=風吹森。若森=和歌森=俄風吹。大森=暴風吹。飯盛山=凍風吹山。

(4) コームラ 八島丈 「風資」P. 45.

数多き風語の中に、古代風語がそのまま残っているものにモノ⁽⁵⁾とムギ⁽⁶⁾とがある。モノはbunu, munuからのmonoで、風吹くとなり、鬼面、雄物、大物は暴れ風が吹く地名とも見られよう。

シモサモノ(下総風)ヒガシモノ。日の下モノ。オキモノ(沖風)卯のオモノ。善光寺モノ。ヤスモノ。ヒガシムン。イナサムン。

(5) 「風資」P. 23. 31. 61. 62. 100. 105. 125.

buに名詞動詞のkiをつけたbukiは風の名詞。それがmukiとなまり、マキ、モギ、ムギ、ミギ、メギとなる。地名の上でも、間木、眞木、蔲、巻、茂木、牟岐、麩、向、三木、右、女木、目木はいずれも風の名詞とな

る。

荒蔲=荒風。古間木=雪風。野麦峠=雪風峠。生麦=雪風。小牧=凍風。酒巻=冷風。鶴巻=弦巻=雪風。妻木=津間木=寒風。

(6) 「風資」P. 24. 41. 124.

韓語の組成から見て、出雲語の風の語幹のbaは、次の様に音韻が変化する。

ya ← a ← ha ba が pa から ma となまる他方、
↑
ha, a となるか、a は 語意を強め
ma ← pa ← ba れば ya となり、強風の疾を意味することになる。風吹くのbaraに風のsiを付したbarasiが、arasi, harasi⁽⁷⁾とはなるが、単に普通の風を意味するだけのもので、暴風のarasiには、風の性質を表わす気象説明の修飾語が伴うことになる。風の重なる修飾語を挙げれば、

俄 a 俄の ai=e

暴 oa=wa 暴れ wai=we

荒 hua=hwa=wa 暖い yu

和 hoa=hwa=ha 危 uo=wo

日 hai=he. nal

突 dat 酷し mo 烈し to

(7) ハラシ風 鹿兒島縣大島「風資」P. 90.

古代地名は風語だけの命名ではない。冷、寒、凍及び雪、氷……等だけの命名もあると共に、風語との合成語の場合もある。それらの要語を挙げれば

n はヌと音発する

冷 tcha {ta 多, 田, 太 te 手, 提,
sa 佐, 狭, 差, se 瀬, 世,

酷冷 tchan {tan 多奴, 円, 反, ten 手奴, 天,
san 佐奴, 讀, 三, sen 仙, 千,

寒 tchu {tu 津, 都, 对, to 戸, 外,
su 須, 譚, 周, so 曹, 宗,

酷寒 tchun {tun 角, 常, 綱, ton 殿, 頓,
sun 須奴, 砂, son 園, 苑,

凍 tchi {ti 千, 值, 乳, 知, 血,
si 志, 紫, 斯, 四, 師,

酷凍 tchin {tin 千野, 陣, 珍, 茅, 淳,
sin 科, 眞, 篠, 信, 品,

凍る kon, hon on
kol hol ol

氷 kongul kokol kohol 古保利,
kongum kagum 加賀牟, 鏡

雪 nun, na~no~nu~ni~ne~

syol {sol, sar~sor~sur~
sir~ser~
tol tar~tor~tur~tir~ter~

雪については拙稿「雪の言葉と地名」日本積雪連合「雪と生活」Vol. 6. No. 3. 参照されたし。

タマカゼ

韓語で震える様な冷寒の単語が tchan チアヌ、その形容の冷めたが、tchanba チアヌバ、それが出雲語

では tan タヌ, tanba タヌバとなる, 単に冷めたは tcha からの taba となる. 丹波の国名は, この冷寒を意味するものと見られ, 古代は非常に寒冷な地方であったと思われる. ta だけでも冷となるので, taba tama は冷風となる. タマカゼは魂風ではない, 北日本沿岸一帯の冬期の寒冷な風であることがうなずけよう.

丹波山 (甲斐). 多波川, 丹波川, 多摩川 (武蔵). 丹波 (岩代) 多万郷 (長門) 田間 (上総) 玉繩 (相模玉庭 (羽前) = 冷雪玉手 (山城) = 冷風.

アナシ

韓語の凍るの古語は kon コヌ. k が h となり hon ホヌ. 更に h も消えて今は on オヌとなっているが, an アヌとも発音される. 西日本の冬季間の寒冷な北西風をアナシ 穴師と云うのは, この an a si の凍風が語源と見られ, 昔は九州から中国地方も, 相当に寒さがきびしかったことが追想されよう.

穴師 (大和, 和泉). 癖足 (大和). 穴無 (播磨). 安師 (播磨). 安志 (播磨). 阿那志 (武蔵).

穴門, 穴戸 = 凍風. 穴吹 = 凍風吹. 穴部 = 凍風.

ナライ

東日本の太平洋沿岸で吹く, 冬季の寒冷な風をナライと云い, 北風の字を当てている. 方向が各地で一定していないので, 山に沿い習って吹くからナライと云ったのでは, その特質の冷めたさが説明されていない. 大陸から南下した寒冷な凍気が, 太平洋からの暖かい気流に触れて雪を降らす寒風であったろう, narai の nara は雪. i は風で雪風となる. 縮めて nare⁽⁸⁾ ともなる. その na の意を強めた nyarai はヤライと発音する. 矢来の地名はそれと見られ, 雪風の吹く所と思われる. 雪が少なくなったので, 今は凍り風となっているが, 関東地方も昔は多雪であった筈. 勿来の関, 名古屋山は雪凍風と解け, 磐城, 常陸も雪冷な地方であったことがうかがわれる.

(8) 「風姿」P. 81.

樞井 (大和, 信濃. 下野). 奈良井 (信濃). 北風松 (武蔵). 北風原 (安房). 成相 (讃岐, 羽後). 習志野原 (下総). 雪凍原. 奈良 (尾張, 武蔵, 上総). 奈良坂 (陸中). 奈良沢 (羽前). 樞原 (上野, 岩代, 越前).

ところが, そのナライが中部地方以西では夏季の東風となり, 全く反対の性質となっている. そのナライは雪風の意ではなく, 太陽の nal のナライと解釈されていたと見られる.

また nari に降だるの意もあるので, 地方によっては, 山から降だる風と思ひ, 習いと解釈されていたことも考えられる.

ハイ

韓語で ha は日の語幹, 日のヒは hai からの he. 出雲地方でも南風をハイのカゼと云うので, 日が南を指

すと共に, 南風をも意味している. 沖繩諸島でも南をハイと云うので, 沖繩島民も出雲語を借用に及んでいたことになる. 夏季に吹く南風の総称となり, 特に大風, 突風, 俄風の意となっているのは, hua e と混同していると思われる. hua は韓語の荒れ, e は強風のことで, なまればハエとなる. その hua の a を強めれば ya となる. その haya に風の t を源えたハヤテは荒俄風で, 疾風と呼ばれる.

暴風はいつも南から襲来するので 漢語でも南の風を巨風と呼んでいる. 吾々が南をミナミと呼ぶのも 暴風風であったらしい. それがウナミ, オナミ, ミナミ, イナミといずれも方角の南の方言となっている. ところが, 韓語でも南を漢音そのままにナミ, ナンと呼ぶので, 古代語や地方風語では, その差別がつかず, 眞南からのミナミと思われていたのであった.

それで海をウミ, ウナと云うのも暴風, 暴風が吹き, 怒濤を起こすことから発した言葉と思われる. その活用のウネリから象形の畝となり棟となったと思われ, それで, 海原は暴風吹と云うことになる.

飯江 (筑後). 南風崎 (長崎). 拜戸山 (近江). 拜志 (上野). 拜田 (豊前). 配松 (常陸). 拜西 (上野).

マヂ, マゼ

韓語でも南風が mamaram なので, ma は韓語でも南のことゆえ, マヂ, マゼは南風, 南風と云えよう. 夏季の暖風が普通であるのに, 方向も特質も相違している地方があるのは, その南の ma を眞のマと混同していることも認められ, なお韓語の mat マツは向い合りの意. 眞向いに吹く風に, マを付けたことも考えられる.

俄の a が更に意を強めれば ya となるので ヤマヂは疾南風のことであり, 東北地方の寒冷な風のヤマセとは違ふことになる.

山路 (攝津, 紀伊). 山道 (肥後, 東国). 山地 (上野).

ヤマセ

広く使われている風名でありながら, その解釈はあまりに漠然としている. 吹く方向もまちまちで, 山の裏から吹くから山脊と云うのが, 普通の様であるが, 必ずしも山からとは限らない. 海から吹く地方もある. 冬季の寒冷風で, 陰曇な天気を伴うのが特質. 出雲族の根拠地であった日本海沿岸では, 大雪を伴い, 風速も大きい北風となっている. それを山の脊から吹くと説く前に, まずヤマの語源からきわめることが必要であろう.

韓語では山を moi と云うのは, 墓のある山の意で, 普通の山はサン, サムと読み, ヤマとは呼ばない. だが日本の古代地名には耶麻, 夜麻, 耶馬等々沢山にある. そのマに風のマを当てれば, 疾風とはなるが, 肝緊な寒冷の意味は持たずに, 南風のヤマジに一致してしもう. 秋田, 青森方言で大雪吹の後の吹溜りの雪山をヤブと云うのは, 雪吹と思われ, 古代地名の養父と同語と見ら

れる。雪の韓語の nun の意を強めた nyun は大雪を意味するが、yun と発音する。その語幹の yu に名詞助詞の ki を付けた yuki のユキが雪の語源である。耶麻、夜麻、耶馬のヤは雪のヤのことで、雪吹くことの yabu a が、yaba から yama となる。それが、耶麻とも夜麻とも呼ばれたものに、山をあてたのであろう。

古代出雲族の信仰は氣象崇拜であって、風、雪、霧、霞…等は寒冷神の神業と信じ、高い山山に降雪することは、神靈が山山に降臨するものとおそれ敬っていた信仰から、暴れ吹く風のブミが海となっている様に、雪吹く所の山をヤマと呼んだことも考えられて、ヤマセは雪吹風と解かれる。雪吹く風であったので、如何にも寒冷な風であったことが肯かれる。

谷本(武藏、陸前) = 矢本(陸前) = 雪吹風 = 矢的。矢目(磐城)八女(筑後) = 雪風。谷村(甲斐)雪風吹。八向、矢向(羽前) = 雪風吹。八俣 = 雪風吹 = 山田。山室、山村 = 雪風吹。山武 = 雪風吹。山家、山辺、山部 = 雪風吹。山名 = 雪風吹。八巻、八牧、山木 = 雪風吹。

ワイタ

地方によって方向も季節も多少の相違はあるが、一般に暴風をワイタと云ったらしい。韓語の暴は oa と綴って wa と発音する。暴れは wai と書き、we と読むのが語法。暴れるの wa go a が wagwa となる。和、輪、和歌、和賀、和古、吾、我、若、脇を冠する古代地名は、この暴れ風吹くと見られる。それで、ワイタ、ワイザ、ウエータ、ウエタ、ワカサは暴れ風と云うことになる。このワ、ウエが梯降すればア、エとなるが、俄の a も ai から e と発音されているので原語で江戸、江田からの枝等の地名は俄風と解けるが、暴の we のなまりの e か、俄の e なのか、その判別は難しい。江戸も大昔は旋風が頻繁で、盛に土塵を捲き上げていたことが、文献に見えるので、俄の e と思われる。

和田 = 暴風。和賀(但馬、相模、下野、陸中)、和賀嶽、川(陸中)若(下野、陸前)我山(何賀)我妻 = 暴風で寒ま。和歌浦(紀伊)若江(河内)脇本 = 陽元 = 暴風吹。鷲尾 = 暴風吹。蕨 = 暴風。蘆科 = 暴れて凍な。

蘆船が暴ら風吹と判明して見れば、古事記の神代記にある、神が最初に生み給うたオノコロ嶋は、この暴ら風吹に乗せて流されたことになるので、そのオノコロ嶋は凍嶋嶋で、氷の嶋と解けよう。そうとすれば、大八洲と云うその八も、実数の八でもなく、数の多い形容でもない、雪のヤのことで、矢嶋、屋嶋、八嶋、と同様に「雪嶋」のことであって、古代寒凍期の氣象を説明していたことになろう。

ワカサ

日本海沿岸で秋から冬にかけて多い南西風で、風力も強く、寒冷である風のワカサも、以上の説明から暴風か暴れ風と解けよう。

地名の若狭も風の名そのままと肯けようが、その狭は風のサでは無く、冷めたの佐、原語は韓語の tcha の冷のなまりの佐で、暴れ冷ではあるまいか。南西の風とは云え、寒冷がその特質とあり、若狭の位置も秋冬は厳凍な地であった筈。ワカサ同音の地名は和賀佐(若狭)、和櫻(若狭)。若佐野(越中、播磨)があり、語韻類語に若紫(常陸) = 暴れ凍バがあり、若月(信濃) = 暴れ寒キもある。若舎人(常陸)のツネは、韓語の tchun サの酷冷に対応する酷寒の tchun のツネのこと、それで、常松 = 酷寒風吹。常友 = 酷寒冷風。

アイの風

北日本海沿岸から東北地方にかけて、夏季に吹く北よりの冷涼な軟風をアイの風と呼んでいる。昔から船乗りに好かれた風で、和風のアイの風と解釈されている。なるほど、韓語での和の hoa がなまれば a となり、ai となり相だが、その解釈は近世の氣象から見た判断で、命名当初の古代における原意は凍るの a の ai であったのではあるまいか。

古代の東北地方の氣象は、現在とは全く違った厳凍で雪の少ない地帯であった筈。1,200 年前には、最上川も全川が凍結したと、山形県史に明記しているので、今の南樺太か根室地方の氣象に相当すると思われる。それら凍寒地の夏季には、南風が吹いて上昇した水蒸気が、北方からの寒冷な気流に遭って、たちまち濃霧になってしもうことは、釧路地方では今でも見られる。樺太の夏季の氣象も同様で、夏季は濃霧に襲われ、かえって秋冬は寒いながらも晴朗となるのが普通である。この濃霧を青森から北海道ではガスと呼んでいるのは、洋語でも方言でもない、立派な古代語の霞のカス、カツが、今に傳わり残っている言葉である。

日本古代の氣候は非常に寒冷であったので、これと同じ現象が中部地方にもあったと見られる。葛城はそのカツれる現象の名詞形のカツラギで、葛城山の神靈が日中には姿を見せずに、夜だけ現われると云う傳説は、その神様は霞や霧の氣象神で、日中は暖かいので姿を見せず、夕方からの冷気で霞や霧となって、現われたことを語るものと肯ける。氣候が次第に温暖となるに従い、この現象も北漸して関東地方に移ったので、粕壁、霞浦、葛飾、勝浦の地名が見えている。蝦夷の記述が初めて記紀に見えた景行天皇時代以前の東北地方が、未開拓地となっていたのも、あたかも近世の東部北海道の様に寒冷な氣象関係によるためであろう。

凍ると云えば直ぐにも氷を連想するが、古代は軽く凝り固るの意に使われていた。韓語で霧をアンケと云うのは、onke の凍気のなまりである。そのアンケがアキとなり、そのまま地名となっている。安芸の国名がそれ。昔は瀬戸内海から上昇した水蒸気が、山陰地方からの寒波に遭って凝るので、霧の anke が深かったことが想像

されよう。それで大昔の ai の風は和イの風ではなく、凍イの風であったものが、気候の変化から、今は和風の程度となったものと思われる。地名に見る相川はアイコアで、アイ風が吹く所、会津は凍イ風。秋田の古名のアイタも、この凍イ風であったろう。

鮎川(近江、上野、羽前、羽後) = 相川、英田 = 鮎田(常陸、羽前、羽後)。愛本(越中) = 凍イ風吹。愛知 = アイ風。阿賀、英賀、阿我、吾、秋鹿 = 凍イ風。愛甲(相模) = 凍イ風吹。

コチ

春先に吹く東風がコチ、所によっては北風又は北東風もコチ、冷めたいのが特質で、コチ、コジ、コツ、コチのカゼと云う。語尾のツ、ジ、チは風と見られ、語頭のコは凍るの ko で、凍風であることは、鹿児島では kon の風の凍の風と、原語が正しく伝えられているので、裏付けされる。

巨智郷(播磨)。五智(越後)。古知野(尾張)古千谷(武蔵)。

韓語で凍るは今は on オヌと云うが、古語は kon コヌであった。出雲語ではその双方の言葉が傳わり、今に残されている。

霞 kadjirangi 加津良岐 葛城 下野、土佐、大和。

紀伊、備前、武蔵

adjiraagi 阿豆良(岐) 吾鬘 尾張。

霜 korike 凍り気 ?

oriike おりき 茨城、栃木。

おりけ 常陸、新治。

雹 kontchak 氷の細片 広島、双三

ontchak " 広島、高田郡

omuntchak あまんぢあく 広島、方言。

omu...氷。omun...氷の、

tchak...細片、チャッコイ(小さい) 東北方言。

霧 anke 凍気、安芸(安芸、土佐) 安下(周防) 案下(武蔵) 奄芸(伊勢) 安岐(豊後、筑前、美濃、岩代) 阿気(大隈、羽後)

イナサ

風吹くの韓語 bun ブヌの bu が、暴れるの wo と結び wun となり、語幹が wa, wo, wu, wi, we, となるが、もともと韓語に w の単音が無く、oa の合成音で、強い音の a, o, u, i, e, となまり、暴れ吹く大風を意味することになる。小笠原は暴風、吹(原は風吹くの bara で動詞)⁽⁹⁾ となる。

その i 音の場合は、ina, ino, inu, ini, ine の伊那、伊濃、伊奴、伊爾、伊称となる。印南、稻見は暴吹風。犬伏岬は暴吹風岬。稲本は暴風吹となる。信州の伊那も、風暴れの所であったろう。

それで、風語のイナサは伊那佐、稻佐で、暴吹風。元元風の性質を説明した言葉であったのが、南東の方向を

指す言葉となっている。

(9) オーカワラ 暴が吹く。静岡、「風資」P. 25.

北

北風でありながら、コチ(東風)と呼ぶ地方もあるのは、その風質の冷めたさからであろう。古代人は常時吹く風の方向をもって、方位を表わしたと云われる。コチよりも寒い風が吹く方向の北は、何を意味したのであろう。韓語で北風を hanbaram と云うのは、寒風の kanbaram の k が h となったもので、北風が寒いことは何処も同じである。

kita の ki は凍るの ko 活用、ta は風で、凍風がキタの北と云うのであろう。

西

風の名が方位を表わしたとすれば、西の爾斯は何の風であったろう。沖繩では入り日の方向を西とは云わずに、イリと呼び、北風をニシと云っている⁽¹⁰⁾。冷寒を最もおそれ敬った気象崇拜の出雲族のことゆえ、また冷寒を意味していたことと思う。出雲では西、沖繩での北は、共に雪をもたらす方向なので、ニは雪、シは風であらう。韓語の雪の nun が、出雲語では、ナ、ノ、ヌ、ニ、ネと活用され、雪崩の nundjal がナダレとなまり、ネギレ、ノマもまた雪崩のこと、またヌメリ、ニメリの雪語方言も残っていることゆえ、ニは雪と見られよう。それで、雪風が爾斯の西と解釈される。

(10) 沖繩語島の北西風のニスパカンジは韓語の nun ba kandii で雪降風、「風資」P. 82. 87.

ヒカタ

南は暴れ風。北は凍風。西は雪風であれば、東は何の風となろう。それを考える前に、ヒカタ風の解釈を先としよう。

ヒカタは眞夏の七、八月頃、南方から吹く高温で湿度の低い穏かな風なので、日方の字が当てられている。その吹く方向がたいてい南風であることから、日方といったのであろう。だが、内陸から夜間でも吹くと云うのは、日方ではなく、そのヒは乾燥の干ではあるまいか。それでは、方の説明が片つかないとなじられ様が、この方はもともと風のカサ=カタの方で、それに方を当てた方が、むしろ無理と云え様。その実例は地名の上にも、数多く見られる。

方、形、片、瀉…等の地名の、上にある文字を検討すれば、いずれも気象語となっている。

その方、形…等には、多いの意の許多の kota のなまりと見られる場合もあるが、方、形…等に風の字を入れ換えれば、一つの言葉となっていることに気が付く。

西瀉、西方、西片は西風か、雪風が多い。北方、喜多方は北風、駒形は凍風、滑方、行方は雪許多か、雪風等は直ぐにも背けるが、緒方、緒形、尾形、小形、小方となれば、全く解釈困難となってしまう。それに風を入れ換えれば、いずれも暴風となり、気象地名と納得されよ

ら、これから推理して、ヒカタは日方ではなく、干方の干風と書くべきものを、太陽信仰に基いて日方となったものと思う。

日方(紀伊). 日方郷(筑後). 干瀉(筑後, 下総). 日形(陸中). 日笠(播磨, 備前, 若狭). 日笠岡(播磨) 東

古語は東に飛賀之をあて、日賀斯とは書いてはいない。後世の国学者は、北牟加斯のヒムカシと解き、日向風と説いている。一般に日向となれば必ずしも東とは限らず南を指すことになる。特に東を指すには日の出と云わねばならぬ。韓語で日の出は pit tchyl, 日が昇るは, he ga tichu で、なまればヒガシとなり相であるが、氣象崇拜の出雲族は、東風を凍風、北風を凍風と呼び、また秋冬の冷風をヒアランと云う例もあるので、朝の東方には冷寒を感じていた筈。恐らくヒガシは冷が風の比賀之ではあるまいか。

冷川(伊豆). 稗柄(常陸)=^{ヒエカフ}冷凍, 稗貫(陸中)=^{ヒエ}冷雪. 氷川(武蔵)=^{ヒエ}冷ゴア. 氷上郷(丹波, 周防, 讃岐, 日向). 比佐(磐城)=^{ヒエ}冷風. 久川(磐城). 久枝(伊予)=^{ヒエ}冷風吹. 久賀島(肥前).

久方(信濃, 上野) 久野(東京, 信濃)=^{ヒエカフ}冷風吹。

"久方の光のどけき", は距離を表わす言葉の様に解釈されていたが、もとの原意は冷風吹く、であったものを、長い年代の間になまったことがうかがわれる。同様に氣象命名の地名も後世漢字が当てられて、象形命名と間違われていたことも、肯かれよう。

イセツ, イゼチ

秋季に吹く強風や台風のイセチは、中部地方の風語。伊勢の方向から吹くので、伊勢の風と解釈されている。だが、必ずしもその方向からだけとは限らない¹¹⁾。i は暴れの wo の活用, inasa の i と同語で強風、颱風のこと、それに風の se を付した ise は、それだけでも暴風となるのに、更にツ、チ、ゴツ、カゼの語を付して呼ぶのは、イセが一つの固有名詞となり、暴風そのままが伊勢の名となったのであろう。風語から見れば se は風ともなるが、冷寒語から見れば、冷めたの sai かまた se となる。古代凍寒期における伊勢の地方も、秋十月ともなれば、相当に冷寒であったろう。伊勢の名は単なる暴れ風ではなく、暴れ冷むの ise であったろう。

伊勢を冠する地名が、伊勢以東にたくさんあるのを見れば、イセは暴れ冷え、イセチは暴れ吹く冷風の意であったろう。

伊勢(播磨). 伊勢崎(信濃, 上野)=イセが^{サキ}吹く。
伊勢原(相模). 伊勢地(伊勢). 伊勢畑(常陸).
伊勢町(上野). 伊勢居地

(11) イセチ, 鳥根縣から北東風, 北西風は伊勢からの方向ではない
「風資」P. 7.

科戸の風

記紀に伊邪奈伎尊が生み給うた国は、ただ朝霧*が薫満

しているだけ、之を吹きはらった気が化して神となったのが、志那津比古, 志那津戸辺で、広瀬の龍田の神社の祭神がそれであり、その風が科戸の風となっている。その方向の風が吹けば必ず雲霧が晴れると云われているが、どうして科長が西北風なのかは説明されていない。

韓語で凍える様な非常に寒いことが tchin のチヌ、出雲語ではそれがなまって sin a から sina となり、その形容の sina goa の sinagowa が科長で、いかにも西北風は凍風である筈。古語なので、風位考資料にはその名が見えてない。愛知県郷村にシナゴチはあるが、その風向は東風とあるので、そのシナは冷凍の形容であることには誤りがない。

ところが、古代地名には、志那, 支那(近江)科長, 磯長(河内)磯長, 師長(相模)を初め科のつく地名はたくさんある。信濃の国もその科の国と見られる。この科は、信濃が高原地帯であり、嚴凍の地なので、氣象を表わす sina と思われるが、従来の解釈では科の木が多いからと説明されているのは逆で、sina な地でも育つ木であるから、科と呼んだものであろう。暴風山山地にも育つから山毛櫨, 風吹の浜にも育つから松と、その例は他にもたくさんある。古代命名法は象形命名ではなく氣象命名であったのは、敢えて地名だけに限られてはいなかった。

科, 納, 品, 信, 階の付く地名は数多くあるが、これらを解析すればいずれも凍ナとなる。もしこれが風語であったとすれば、陣風の djin のなまりのシナで、猛風となる。

これらの検討は、寒冷凍語彙, 雪氷語彙等と総合比較の上に判断しなければ、正鵠を得られないので、今後に期することとする。

更科, 倉科, 保科, 妻科, 豊科, 蓼科, 埴科(以上信濃). 辛科, 韓級, 片品, 佐新, 信男, 生品(以上上野), 岩科(伊豆). 宇品(安芸). 笠科(上野)山科(山城)山階(豊後). 藁科(駿河). 吉名(磐城). 高階(武蔵, 磐城).

陣峰(羽前, 越後). 陣内(肥後). 陣場(岩代). 陣原(筑前).

* この朝霧が anke の aki, それで、秋津嶋と云うのも津は韓語の tu で、ののことゆえ、秋の嶋は朝霧の薫満した嶋となり、象形地名の蜻蛉嶋ではなく、古代氣象そのままを説明した霧深き嶋であったと見られよう。

その他の風語

アオキタ. 中部以西の秋の北風. a は凍る, o は助詞で、東北地方の ai と同語と見られる。それが青北となまっている。

栗生(加賀) 栗生田(羽前) 阿保郷(伊賀) 阿尾(越中) 阿翁崎(肥前) 英遠浦(越中)

オキ 冷寒語とすれば、ongi, oki は凍る。風語から解けば woki の oki で暴れとなる。転じて暴れるところの海上が沖となる。山地では暴れ風、海岸では沖風。隠岐、波岐(因幡)興玉祠(伊勢)置賜(羽前) = オイタマ ^{オキ} 暴れ冷。興津、沖津 = 沖風。

オロシ ^{オロシ} 暴ら風の転の orosi, 元元は強風のこと。オロシベは暴風吹。それが山から吹き下ろす風となり、風の文字が作られた。下嵐江(陸中) = 暴風吹。

カマイダチ kamai はつむじ, datti は突風で、旋突風のこと。

出し風 突を tot と読む原語は韓語の dat, tat のなまり, datsi は突風となる, それが出しとなまったもの。

ジゲ dji は湿潤の意。そのジル, ジタは泥濘から汁, 代となっている, 風語では雨気の風。このジが地となり, 地風となっている。転じて, 湿ける 海のしけ。重川(甲斐)重岡(豊後)茂森(陸奥)茂安(肥前)

タカとサガ 佐賀=多賀は冷めたの意。気象崇拜の信仰では, 上空ほど冷寒の度が高いことから転じて, 上空をタカ, サガと呼ぶ様になった。原意は冷風。なまってタカは上空の北風。サガは上空からの下り風となっている。

高松(備中, 安芸, 讃岐) = 冷風吹。高丸山(岩代, 陸前) = 冷風吹山。高尾 = 冷風吹・高向(越前, 河内) = 冷風吹 = 多加牟久。

相模 = 佐賀美 = 冷風。佐方, 相方 = 冷風 = 坂田。酒田 **東尋坊**。悪僧東尋坊の恨みの悪風と恐れられているが, 実は突陣風で烈しい突風。

ベツト風 hoi の he は韓語の旋風。too は烈しく吹くの意。なまって betoo は烈しい旋風となる。愛知の知多, 碧海, 三重の志摩, 吉津, 静岡の田方等の風語。

ヘーシ。大風の終りに, 今までとは反対の方向から吹く強烈な風を, 南嶺喜界嶋ではヘーシと云う。旋風の hoi が he となり, 風は si で, 旋風のこと。また出雲語。

ネコツ。北風。ネは雪, ネコは雪降り, ツは風ゆえ, 雪

降り風となる。

根子地(美濃)。猫間(山城) = 雪降風。猫間嶽(岩代)。根本, 根元(下総, 常陸) = 雪風吹。

ネギタ。北風(鳥根, 福浦, 美濃小野その他)もともと雪風であるが, 磁石の指針の北が, 子に当ることから, 眞北風と解釈されている。

シモカゼ。青森県の各地に, 北風や北東風に, シモ⁽¹²⁾を冠する風語がたくさんある。シモオヒは霜追の意で, 上に対する下ではない。

(11) シモカゼ「風姿」P. 60.

地名に資母郷, 信茂郷, 征茂郡があり, 下を冠する地が多数にあるが, その中には, 風吹くの動詞の漢字の原, 俣, 元, 丸村, 守, 枝を伴うので, 下は気象語であると見られる。

韓語で凍える寒さの単語が tchi, その形容が tchim となる, 方言のチミタイがそれ。それがなまれば sibu, simu となり, 凍ばれ, 凍みる, 氷のシガの志賀, 霜となる。それで, 志波, 紫波, 斯波, 柴, 芝, 子浦, 四保, 塩, 志布, 波, 志摩, 志万, 四万, 新万, 島, 紫美, 四明…等の地名は, いずれも, 嚴凍の地と見られる。ところが, それらの語尾が助詞ではなく, 風語の ba, ma のなまりと見れば, 凍風, 凍風となるので, 風語が地名となっている所もあると云え様。

以上は今も尚使われている風語の解析である。風, 風吹くの古代語は bal 系の言葉であり, 元々 d3a 系の言葉は霧, 霞を意味したものであった。それが, 揺り動かすのカンジエが風を意味する様になって, bal 系の言葉は忘れられたと見られよう。それで,

加佐	加曾	加須	加志	加世
波佐	波曾	波須	波志	波世
阿佐	阿曾	阿須	阿志	阿世

等の展化及びその関連語は, いずれも霧, 霞を意味する古代語であったことになる。その解析は稿を改めて説明する。

(北方民俗研究所)

最近冷害記録

1953 (昭和 28 年) 6~8月の日照不足, 6月中旬, 7月中旬, 8月下旬から9月上旬にかけての低温。稲の収穫減北海道 24%, 東北 15%

1945 (昭和 20 年) 5月より6月上旬, 7月の低温に加え, 台風の被害, 戦時中の肥料不足も加わる。稲の収穫減全国平均 35.6%, 反当收量 1,353 石

1941 (昭和 16 年) 6~9月の低温, 多雨, 日照不足。稲の収穫減北海道 35%, 全国平均 17%

1935 (昭和 10 年) 特に北海道の被害甚大。稲の収穫減 39%

1934 (昭和 9 年) 東北地方, 北海道は大正 2 年に次ぐ大冷害。稲の収穫減全国平均 17%

1931 (昭和 6 年) 天候不順にて凶作。稲の収穫減北海道 48%, 東北 10~40%

1913 (大正 2 年) 東北地方, 北海道早冷。稲の収穫減北海道 50%, 東北地方 30%

1905 (明治 38 年) 稲収穫減北海道 35%, 全国 18%